

檜葉テックニュース

ジャーナリスト
スクール3班

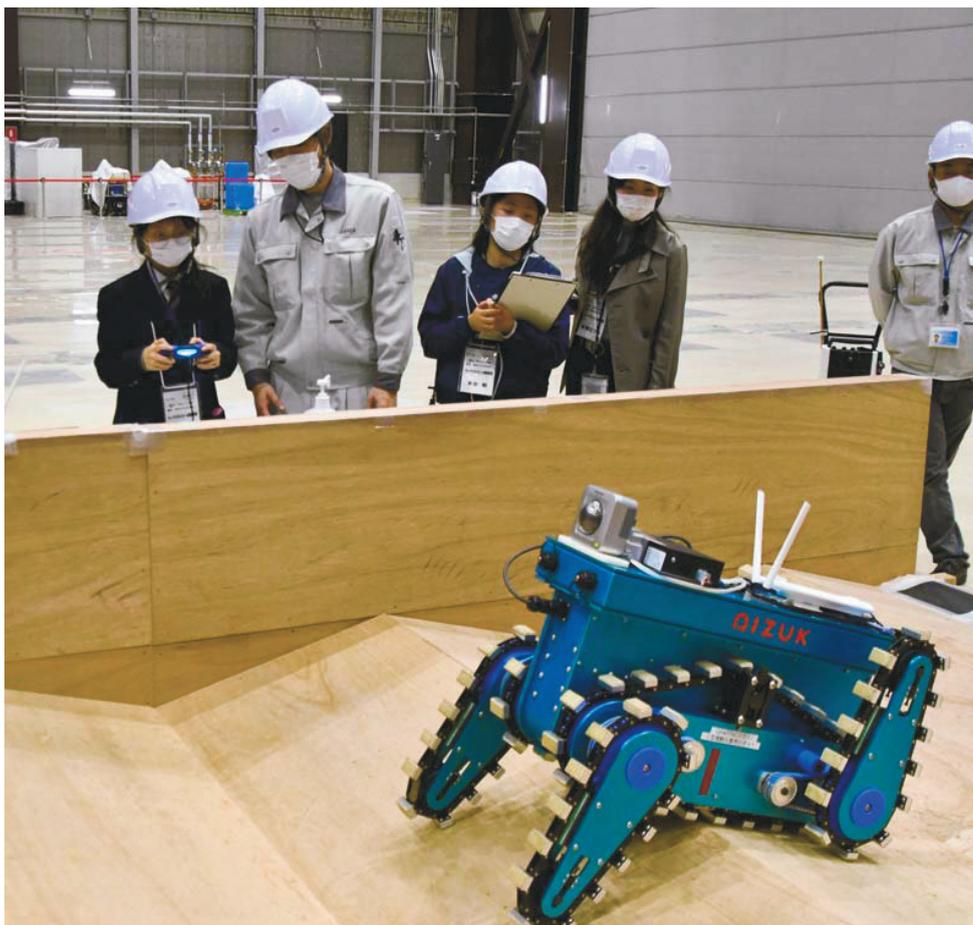
ロボットが拓く廃炉

人々の熱い思いのせ

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から10年半あまりが経過した10月30日。私たち、ジャーナリストスクール3班は福島県檜葉町の日本原子力研究開発機構（JAEA）の檜葉遠隔技術開発センターを訪ねた。そこには日常と違う異空間が広がり、近未来的な施設だと感じた。原発廃炉作業に用いるロボット技術に理解を深め、そこで働く人たちの熱い思いに触れた。（被川瑠紋、佐藤花香、本田結）

同センターは主に福島第一原発廃炉に向けた研究開発を加速させるため、ロボットの実証実験などを行う施設。試験棟（地上2階建て、鉄骨造）と研究管理棟（地上4階建て、鉄骨造）からなる。総工費約100億円をかけ、2016（平成28）年4月に運用を開始した。

試験棟ではモックアップ（実物大模型）を使った試験ができる。実際に演出しにくい高層建築物や水中などでの試験が可能だ。廃炉作業に関わらないロボットの試験にも活用でき、高専学生によるロボットコンテストなどの会場にも使われている。昨今の新型コロナウイルス禍においてリモートで試験を実施した事例もあるという。試験棟の前に立つとまず、特撮



ロボットを操作する取材班

ヒーロー「ウルトラマン」を彷彿（ほうふつ）とさせた。建物の高さは40層ある。

研究管理棟では原子炉を4面スクリーンで立体的に再現したバーチャルリアリティ（VR）が体



VRで原子炉内を疑似体験

験ができる。基になった映像は実際にロボットが炉内を撮影したものだ。画面には空間線量なども表示され、臨場感あふれる映像と相まって、緊張



高さ40層の試験棟

感に見舞われる体験だった。取材で話を伺った加島洋一副センター長（60）は、「原発事故に直接関わったわけではないが、原子力に携わっている者として、責任を感じている。確実に廃炉を成し遂げ、地域の復興に力を尽くしたい」、主に事務の仕事をしている柴沼蒼さん（27）は「人と接することが多く、県外の人は『福島が怖い』と語っている人がまだまだ多いと感じる。正しい情報を発信したり、イベントや祭りなど地域と関わることで福島の復興のきっかけになれば」とそれぞれ思いを語る。

ロボット開発という「固く、冷たい」イメージもあるが、そこには働く人の熱い思いが宿っていた。福島の復興の行く末を見届ける私たち世代が、風化させることなく自分の問題として捉えなければならぬと感じた。

水中・走行ロボット操縦体験

難しさ、技術の高さ実感



ロボットの操縦を体験する被川記者（右）

走行型ロボットは危険箇所の階段昇降に、水中ロボットは炉心溶融（メルトダウン）した原子炉建屋内探索にそれぞれ用いられる。走行型、水中の両方を操縦したが、ロボットのカメラを経由して作業をするため、縦と横だけでなくカメラ越しの奥行きも考えてロボットを操縦する難しさに気づいた。廃炉にはまだまだ時間がかかる。それを支えることの難しさや技術を実感した。（班長・被川瑠紋）



安積黎明高1年 祓川瑠紋

檜葉遠隔技術開発セン（JAEA）が組織する原子力災害対応に向けたロボットシミュレーション



相馬高1年 佐藤花香

東日本大震災が起きた時に所属している。記憶に残っていることもあるが、忘れてしまっている



植田小6年 本田 結

私が檜葉遠隔技術開発センターに行っておどろいたことは、VRで物の

システムの開発に携わる施設である。被災地を「チャレンジの地」へと変えるべく浜通り地域に新たな産業の集積を目指す、国家プロジェクトである「福島イノベーション・

学習続け見聞広げたい

コースト構想”のもとに多様な挑戦を続けてい

ことも多い。震災を風化させないために語り継いでいくことが大切との思

伝えていく責任を痛感

を決めた。

檜葉遠隔技術開発センターでは、原発の廃炉に欠かせないロボットの研

復興担う思い分かった

ことができました。

試験棟には、布でできた高さ約20畳もあるシャッターがありました。さ

原発廃炉、多様な視点で

卒業生の冒



分にサポートできるのか不安だった。しかし、対応してくださった方々は

今回ジャーナリストスクール卒業生として檜葉遠隔技術開発センターの取材に同行した。この施設は福島イノベーション・コースト構想の廃炉を担っている。技術開発やロボットについて何も知らない私は施設に向かうまで受講生の取材を十

私たちが製作しました

お忙しい中、取材にご協力くださった檜葉遠隔技術開発センター職員の皆さん、ありがとうございました。（取材班一同）

